動物と話がしたい！

動物応用科学科 3 年　海老原　寛

これが自分の小さい頃の夢である。それで特に何がしたいというわけでもない。ただ、大好きな動物と話ができたらどんなに楽しいだろうと思っていた。それに、動物を助けたいと思うようになるにつれ、動物と話すことができればそれを生かすことができるだろうと思うようになった。

そのようなことを考えていたあるとき、「バウリンガル」という商品が話題になった。これはイヌの鳴き声から感情がわかるというものだ。当時の自分は、イヌの感情が理解できる夢のような道具にとても憧れた。家でイヌを飼っていなかったために購入することはなかったが、いつか買おうと心に決めていたことを覚えている。

しかし、時が経つにつれ、そのような感情は消えていった。野生動物の置かれている状況を知っていくとともに、動物と話すことに恐怖を感じるようになっていったからである。もし話ができたとしても、自分が夢見ていた楽しい話ではなく、動物たちの苦しみばかりが聞こえてきそうで怖かった。きっと、真実を知ることから逃げていたのだろう。さらにもっと言えば、動物達の声が聞こえたらめんどくさいと思うようになったのかもしれない。

それに加えて、人間側の感情も考え始めた。それは、なぜ人間は動物と話をしたがるのだろうということだ。なぜ人間の言葉をまねる鳥や、人間の言葉のような鳴き声を発するペットが注目されるのだろう。考えた結果、それは人間同士のコミュニケーションが減ってきたからだろうという結論に至った。人間同士のコミュニケーションが難しくなったため、足りなくなったものを動物に求めているだけなのではないか。そう考えると、自分も当てはまる気がして嫌な気持ちになったのだろう。

現実を考えれば考えるほどに動物と話をすることに嫌気が差し、そのようなことを考えることをやめてしまった。動物が自分にとって都合のいいものでしかなくなったのかもしれない。

動物の研究は、動物を探ることである。それはある意味、動物とコミュニケーションをとることである。調査に行くと、フンや足跡などのフィールドサインを見つけることができる。ある時は、動物が特徴的な行動をしているのを見ることができる。それらは、人間がメッセージを受け取ることができるように、動物達がヒントを与えてくれているのだと思う。それに対して人間側は、動物たちを気遣いながら、そっと生活をのぞかせてもらう。お互いがお互いを考え、人間が動物からのメッセージをちゃんと受け取れたとき、論文というものが出来上がるのかもしれない。

動物たちが人間にメッセージを送っていると考えるのは、ただの理想でしかないだろう。しかし、研究のためには相手を気遣うことはとても重要なことであると思う。そのためにはコミ

ュニケーションをとることが大切であり、コミュニケーションをとるためには、たいてい会話が必要である。そう考えていくと、研究するということは、動物と会話をすることなのかもしれない。

動物と話をすることに対して嫌気が差していた自分。しかし、その自分は今この場所で研究をしている。それはまだきっと、心のどこかで『動物と話がしたい！』という気持ちがあるからなのかもしれない。